
Fate/Zero 紫の髪の少女と金髪の悪魔

冥府の死神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / Z e r o 紫の髪の少女と金髪の悪魔

【Nコード】

N O 2 2 0 Z

【作者名】

冥府の死神

【あらすじ】

どんな願いでも叶えると謳われる聖杯を巡る七組の魔術師^{マスター}と使い魔^{サーヴァント}の殺し合い……聖杯戦争。

冬木の地で四度目の聖杯戦争が開催される時。

間桐の暗闇の地下で少女は金髪の青年と出会う

『問おう。お前が俺を呼んだマスターか？』

少女桜とかつて悪魔と呼ばれた青年が出合った時運命が変る

キャラ紹介（前書き）

後ほど追加があります

キャラ紹介

F a t e / Z e r o

クラス不明本人が付けたのがダークブリングマスター（DBマスター）

真名ルシア・レアグローブ

筋力 A

魔力 C

耐久 A +

幸運 E

敏捷 B +

宝具 A +

技能（英霊独自の保有スキル）

カリスマ D

・・・軍団を指揮する天性の才能。カリスマは稀有な才能で、一国の王としてはBランクで十分と言える。

戦闘続行 A

・・・生還能力。瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

対魔力 A・・・A以下の魔術は全てキャンセル。事実上、現代の魔術師では傷をつけれない。

単独行動Bマスターから魔力供給を断つてもしばらくは自立できる能力。ランクBならば、マスターを失っても二日間現界可能。

宝具

全てを消滅させる暗黒の母なる紫珠

ディストーション

宝具ランクA+

術者の周りの空間を歪ませ、圧縮し、そこにあるすべての物質を消滅させる。

巨大な闇の十の魔剣

ネオ・デカログス

宝具ランクB+

十剣のDB。テン・コマンドメンツと同じ能力を持ち10個のDBで強化された魔剣。

ワープロード

宝具ランクC+

瞬間移動のDB。人や物を瞬時に送ったり呼び寄せたりできる。

キャラ紹介（後書き）

こんな感じです

始まりの夜

00時0分頃

暗い闇の中一人の紫色の少女が廊下を歩いていた。

「・・・・・・・・」

少女は人形のように無機質な空虚な表情でその目には感情があまり見られないという表情をしていた。

少しの間ゆっくり歩いて行くと白髪の男性が向こうから歩いてくる。

「やあ、桜ちゃん。びっくりしたかい？」

男は頭髪が残らず白髪で肌には至る所にはんこんが浮き上がり、それ以外の場所は血色を失って生気が感じられなかった。

「・・・・・・・・うん。顔、どうかしたの？」

紫の髪の少女桜は一瞬驚愕して怯えるがすぐに元の表情に戻り男に尋ねる。

「ああ。ちよつとね」

男は左側が見えていなかったそれだけではなく瞼や眉を動かすこともできない状態だった。

桜が怖がるのも無理はない。

「また少しだけ、体の中の虫に負けちゃったみたいだ。おじさんはきつと桜ちゃんほど我慢強くないんだね。」

男は苦笑いをしたつもりだが、またしても不気味な表情になってしまったのか、

桜はますます怯えてしまった。

「・・・カリヤおじさん、どんどん違う人みたいになっていくね」

桜は白髪 of 男雁夜に言う。

「そうかもしれないね」

雁夜は頷きながら桜に言う。

「今夜はね虫蔵に行かなくていいよ、
もっと大事な儀式があるからってお爺様が言っていたよ」

桜は雁夜を見ながら伝える。

「ああ知っているよだから今夜は代わりにカリヤ小父さんが地下に行くんだ」

雁夜は桜の顔を見ながら言う。

「カリヤおじさん、何処か遠くへ行っちゃうの？」

桜は雁夜を覗きこむようにして見て尋ねる。

子供らしい鋭い感で、桜はカリヤの未来を察したのかもしれない。だが男カリヤは、幼き桜に必要以上に不安を感じさせるつもりはなかった。

「これからしばらく、小父さんは大事な仕事で忙しくなるんだ。仕事が忙しかったらこんな風に桜ちゃんと話をする時間も、あまりないかもしれない。

雁夜は桜を見て不安をさせないように伝えようとする。

「そう……」

サクラはカリヤから目を逸らしてサクラしか見えない場所を見ているような目つきになった。

雁夜はどうするか一瞬迷い話題を変えた。

「なあ桜ちゃん。小父さんのお仕事が終わったら、また皆で一緒にあの公園に遊びに行かないか？
お母さんや凜お姉ちゃんも連れて」

雁夜は桜の顔を見ながら自分の提案を桜に伝える。

「……そんな風に呼べる人は、いないの。居なかったんだって思いなさいって、
そうおじい様に言われたの」

桜は少し途方に暮れてから戸惑いながら雁夜に「一こと言っ。

「そうか……」

雁夜は桜の前に膝をつき、まだ自由に動かせる右腕で、そっと優しく桜の肩を包んだ。

胸に抱き寄せてしまえば、桜には自分が泣いている顔を見られないで済むと雁夜は考えた。

「……じゃあ・・・遠坂さんちの葵さんと凜ちゃんを連れて、小父さんと桜ちゃんと、4人で何処か遠い場所に行こう。また昔みたいに遊ぼう」

雁夜は桜を胸に抱きしめている状態で言う。

「……あの人達と、また会えるの？」

桜は腕の中から、細い声で雁夜に問う。

「ああ、きっと会える。それは小父さんが約束してあげる」

雁夜はそれ以上は言えなかった。

涙が止まった頃合いを見計らって、雁夜は桜から手を離れた後「こ」と言う。

「じゃあ、おじさんはそろそろ行くね」

雁夜は立ち上がり桜に言う。

「……うん。バイバイカリヤおじさん」

桜は別れの言葉が、この場には相応しものと、子供ながらに察したらしい。

桜は背中を向けてゆっくり自室に戻ろうとした時に足元に綺麗な紫

の球が落ちていた。

「……」

桜はその紫の球を不思議そうに見ながら拾い自室に戻る。

始まりの夜（後書き）

誤字脱字がありましたら報告お願いします。

次回もお楽しみ

次回は奴が登場します悪魔が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0220z/>

Fate/Zero紫の髪の少女と金髪の悪魔

2012年1月14日21時49分発行